

がんと共に生きる



●「がん」との共存

近年、医療の進歩により、「がん」は完治、または進行を遅らせることができる病気になりました。

完治が困難な状態で、「がん」と共存することとなった場合でも、症状を和らげる治療法は日々進歩しています。また、新たな抗がん剤が開発され、抗がん剤による副作用を和らげるための取り組みも進んでいます。

がんと診断され治療を受ける中で、患者やその周りの人は、さまざまな困難にぶつかり、苦悩します。そのような時でも、自身の考え方や対応を変えることで、より前向きに日々の生活を送ることができるようになります。

●「がん」との共存で心掛けること

あわてない

「がん」と診断されると、誰もが動揺すると思います。しかし、時間の経過とともに少しずつ和らぎ、冷静に「がん」について考えることができます。ゆっくり心の整理をしていきましょう。

学 ぶ

まずは主治医から話を聞き、状態を把握しましょう。分からないことは、主治医や医療スタッフに確認しましょう。

相 談

悩みや負担は人それぞれ異なります。自分に合った相談の場を見つけましょう。「広島がんネット がんについて相談したい」で相談の場を紹介しています。

<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/gan-net/mokuteki-soudan.html>



あきらめない

医学は日々進歩しています。セカンドオピニオン(※)を受けるなど、最善の方法を模索しましょう。

※セカンドオピニオン 患者が納得のいく治療法を選択できるように、治療の進行状況、次の段階の治療選択などについて、現在診療を受けている担当医とは別に、違う医療機関の医師に「第2の意見」を求めること。

周りの人を 味方に

医療スタッフや家族、行政、民間団体などは、患者のために何かできることはないか、真剣に考えてくれています。つらい時は、一人で抱え込まず、誰かに助けを求めましょう。

がんと共に生きる夫婦 ～横山 政治^{よこやま まさはる}さん・八江美^{や え み}さん～

政治さんががんの告知を受けたのは、長年勤めていた仕事を定年退職し、八江美さんと共に、時々来る孫の成長を楽しみに過ごしていた矢先のことでした。医師からの告知に、政治さんは頭が真っ白になり、八江美さんも何をどう考えたらよいのか分からない状態でした。そんな中、治療が始まりました。

先が見えない不安、治療の苦痛、金銭的負担に加え、薬の副作用で「話す、食べる、字を書く」ということが今までようにはできなくなった厳しい現実。しかし、政治さんには「孫の成長を見届けたい！ 生きたい！」という強い思いがありました。八江美さんは、その思いに逆に励まされて介護してきたそうです。

政治さんは「支えてくれた妻と、治療の中での小さな変化を共に喜び、共に居てくれる医療スタッフ

のおかげで今がある」と話します。

告知から4年、政治さんと八江美さんは、今も病気

と付き合いながら、生かされた命に感謝し、一日一日を大事に過ごしています。元々歌が得意だった政治さんは、横笛の練習を始めました。最初は呼吸リハビリのつもりでしたが、少しずつ音になり、何となく愉快的な音色に変化していきました。今は人前で披露することを目標に、日々練習に励んでいます。「ピーピーヒュー」と鳴る音に、「うるさいなあ」と聞こえるように笑顔でつぶやく八江美さん。二人で過ごす何気ない日常に“共に生きている喜び”を感じています。

